



Title	名古屋大学図書館蔵『いざよひ物語』の成立
Author(s)	三村, 晃功
Citation	語文. 1990, 53-54, p. 53-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68807
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

名古屋大学図書館蔵学『いざよひ物語』の成立

一はじめに

中世類題集については、筆者はこれまで『二八明題集』『題林愚抄』『明題和歌全集』『摘要和歌集』などの成立に關わる基礎的研究を公表し⁽¹⁾、近時も『続五明題和歌集』（以下『続五明題集』と略

称する）の調査報告を発表して⁽²⁾、この領域については多少研究を進めてきたが、この『続五明題集』を精査、検討していた際に想起されたのが、『いざよひ物語』なる『風雅集』から『新続古今集』に至る五勅撰集からの抄出歌で編纂された類題和歌集であった。

二問題点の所在

さて、本書の成立の問題の検討に入る前に、本書の書誌的概要に言及しておこう。この点については、安田氏の前掲論文に簡にして要を得た解説があるので、ここにはそれを引用させていただくことにしたい。

安田徳子氏『いざよひ物語』翻刻（『名古屋大学国語国文学』第44号、昭和五四・七）に、簡単な解題を付した翻刻紹介があり、その内容、成立時期、編纂目的などについては、おおむね正鵠を射た記述がなされていて、ほとんど問題にするには及ばないのである。しかし、本書の成立過程については、多少曖昧な論述が指摘され、

三 村 晃 功

学館大学図書館之印」「名古屋大学図書館」「来田家蔵」の印がある。表紙見返しに極札二枚が添付されている。一枚は「高辻殿 適長卿 いさよひ物語(全一冊)」とあり、いま一枚には「和歌四天王之内淨弁」と記されている。書写者は不明であるが、少なくとも極札にいう「淨弁」は、「新後拾遺集」撰定より前の応安五年に没しているので、内容からみて時代が合わない。「適長」の方は尊卑文脈、及び群書類從所収の「菅原系図」には該当する人物が見当たらず真偽のほどは判断できない。

室町後期写か。ところで、本書は、冒頭に序文があり、続いて、「寄月恋」七十一首、「寄雲恋」八首、「寄葵恋」から「寄木恋」まで各一首の都合百二十三首を収載する小規模の類題集であるが、次の(1)つらきにもひとりや月のやどるらん こゝるにしまぬひとをこふとて

(寄月恋・三)

の出典不詳歌を除くならば、収載歌はすべて、「風雅集」から「新続古今集」までの五勅撰集に収録されている。したがって、本書の成立の問題を考えると、本書の収載歌は当該勅撰集から直接採録されたのではないかという予想がまず生ずるので、この点を検討してみると、たとえば、歌題の視点から次の

(2) いかにしてなみだつゝまんかげやどす 月こそ袖の色にいづとも

(寄月恋・一)

(3) よな／＼の月もなみだにくもりにき かげだに見せぬひとをこふとて
(同・一二)
(4) とひこかしまたおなじ世の月みて かゝるいのちののこる
ちぎりは

(5) つらき名のたゞひまでやはかこづべき わかれし袖の有明の月
(同・二二)

(6) 有明の月をその夜のかた見にて なぐさむほどのちぎりだに
なし
(同・二五)

(2)～(6)の五首を見ると、(2)は「新拾遺集」の「前大納言為定」の詠で、詞書に「正和五年九月十三日夜後醍醐院みこの宮と申しける時、五首歌めされけるに、月前恋」とあり、(3)は「新千載集」の「前中納言定家」の詠で、詞書に「洞院撰政家百首歌に、不逢恋」とあり、(4)は「風雅集」の「前中納言定家」の詠で、詞書に「逢不会恋の心を」とあり、(5)は「新後拾遺集」の「太上天皇(後円融院)」の詠で、詞書に「永和四年八月十五夜、三首歌講せられし次に、月前別恋」とあり、(6)は「藤原光經」の詠で、詞書に「建保七年二月内裏歌合に、曉更恋」とあつて、「いさよひ物語」の「寄月恋」の歌題と一致をみないのである。ということは、「いさよひ物語」が(2)～(6)の五首を直接当該勅撰集から採歌した可能性は皆無と言つてよく、安田氏が「直接、勅撰集を資料として本集が編まれたと見ることは疑問である」と推測されるとおりである。それでは、「いさよひ物語」収載歌はいかなる作品から採録されたのであらうか。この点について、安田氏は、「風雅集」から「新続古今集」までの五勅撰集をもとにして撰ばれた類題歌集に、「続五明題集」(永正二年「一五一五」、今川氏親、東素純撰)がある。(中略)この集と本書の間に直接の関連は認め難いが、この集の恋部と本書を比較すると、歌の配列等に共通する点も多く、歌の分類に共通した意識を見出すことができる。あるいは、このような類題歌集をもとにして、本書は編まれたのではなかろうか」と言及

され、本書が『続五明題集』のごとき題類集から抄出された可能性を示唆された。それでは、『続五明題集』のごとき題類集はいかなる名称の作品であろうか。この点については、残念ながら、安田氏はこれ以上の言及を避けておられるので、現在のところ、『いざよひ物語』の撰集資料は不明と言わざるを得ないのである。

ところで、『いざよひ物語』収載歌と『続五明題集』のそれとを比較、検討してみると、『続五明題集』が収載していない『いざよひ物語』収載歌は、すでに引用した(1)の出典不詳歌と、次の『新後拾遺集』の「覺普法親王」の

(7) わすれてし人は軒ばの草の葉に かけてもまたすくものふる
まひ (寄蜘蛛恋・100)

(7)の歌のわずかに二首を数えるに過ぎないのである。すなわち、安田氏は、本書と『続五明題集』との関係を、「直接の関連は認め難い」と否定されるけれども、この事実は、これまで二次的撰集としての類題集の成立の問題を扱ってきた経験からみて、筆者には、両書の間に充分密接な関連がある、と見なし得る根拠になるようす推察されるわけである。したがって、『いざよひ物語』と『続五明題集』とは、はたして直接に関係があったのか、否か、この問題について、以下、具体的に論述していきたいと思う。

三 撰集資料の再検討

さて、『いざよひ物語』収載歌と『続五明題集』のそれとを比較して、最も密接な関連が認められるのは、「寄雲恋」の例歌である次の八首である。

(8) ものおもふこゝろの色に染められて めに見るくもゝ人や恋
しき (寄雲恋・七二)

(9) 恋あまるながめを人はしりもせじ われと染なす雲のゆふぐ
れ (同・七三)

(10) 今しもあれ人のながめもかゝらじを きゆるもおしき雲の一
むら (同・七四)

(11) 待なれしむかしににたる雲の色よ あらぬながめのくれぞか
なしき (同・七五)

(12) ふきまよやらしの空のうき雲の 行あふべくもなきわざり
哉 (同・七六)

(13) あしひきの山のはとをき天雲の かゝるかたなき身の契かな
も (同・七七)

(14) あまぐもの八重かざなれる峯なれや 恋もうらみもはれぬこ
ふろは (同・七八)

(15) しられじな人の心のうきぐもは 我そではれぬしぐれなりと
も (同・七九)

この(8)～(15)の八首のうち、(8)～(14)が『風雅集』の為兼・花園院・永福門院・朔平門院の詠、(12)～(15)が『新千載集』の為定・良基・徽安門院・尊氏の詠であり、これらの八首は、当該勅撰集においても、『いざよひ物語』の配列順に収録されているが、面白いことに、『続五明題集』は「寄雲恋」の例歌として、このほかに『新拾遺集』と『新続古今集』からも採録しているが、この八首に限って言えば、『いざよひ物語』と『続五明題集』とは、すべての面で完全に符合しているのである。ちなみに、このほかの類題集の「寄雲恋」の例歌の収録状況を見ると、『題林愚抄』と『明題和歌全集』

には、このほかに『続千載集』と『新拾遺集』からの詠が認められるが、『風雅集』からの詠と(4)の詠は収載されておらず、また、『摘要題和歌集』は該歌題と例歌を収録していないので、これらの類題集から『いざよひ物語』が採録した可能性は皆無ということになる。ところで、この八首に限定すれば、『続五明題集』とまったく同じ条件を備えた類題集に『類題和歌集』が見出され、その点から言えは、『いざよひ物語』と直接関係のありそうな作品として、『続五明題集』のほかに、さらに『類題和歌集』を候補にあげなければならないのであるが、はたして、この問題についてはいかがである『寄雲恋』の例歌である。

(16) 月たにもしのばゝしらじわが袖に かゝるなみだのやどりありとも

(寄雲恋・四)

(17) 月見ればねられぬ夜半といひなして なみだばかりをなをつむかな

(同・五)

(18) 人とはゞ月ゆへ落るならひぞと こたへてそでのなみだとめまし

(同・六)

(19) ひとしれぬ夜はの思ひのかよはずは おなじねざめの月を見ましや

(同・七)

この四首は、いずれも『新千載集』収載歌で、(16)が『月前恋』の俊光女の詠、(17)が『寄月恋』の長綱・義詮・遊義門院の詠であるが、この四首の収録状況を見ると、『続五明題集』が『いざよひ物語』と同様に『月前恋』『寄月恋』の歌題を連続させて配列しているのに、『類題和歌集』は『月前恋』の歌題は恋部三

に、「寄月恋」の歌題は恋部四にあって、両題の間にあまりにも間隔があき過ぎてるので、『いざよひ物語』の編者がこの両題を連続させて配列することは、ほとんど不可能に近いと言わざるを得ないであろう。ここに、『いざよひ物語』が参考した類題集として、唯一、『続五明題集』が残つてゐるのである。なお、『続五明題集』と『類題和歌集』とがこれほどまでに完全に符合するのは、『類題和歌集』が撰集資料として、『続五明題集』をそのまま利用しているからではあるまい。

したがつて、ここで改めて、『いざよひ物語』と『続五明題集』とが直接に関係があつたのではないか、という問題を検討してみよう。

さて、『いざよひ物語』の『寄月恋』の例歌である、

(20) 長月の有明の月はいでにけり こひしき人のかげはみえねど

(寄月恋・二四)

(21) 有明の月をその夜のかた見にて なぐさむほどのちぎりだになし

(同・二五)

(22) いかにせんこぬよあまたのそでの露 月をのみまつ夕ぐれのそら

(同・二六)

(23) みよかしなはつかあまりの月だにも 今まで人にわかれやは

する

(同・二七)

の(20)~(23)の四首は、(20)~(22)が『新続古今集』収載歌で、(20)が『秋夜恋』の為仲の詠、(21)が『曉更恋』の光経の詠、(22)が『暮恋』の後鳥羽院の詠で、(23)が『新拾遺集』の『深夜恋』の賴政の詠であるが、ここで翻つて、これらの歌題を異にする四首が何故に、『いざよひ物語』では『寄月恋』の歌題下に連続して配列されているのかの問

題を考えてみよう。ところで、この問題に示唆を与えるのが、原拠資料の勅撰集や『類題和歌集』であることは今更言うまでもないが、しかし、これらの文献が不適当であることについては、すでに前述したとおりであるから、ここに有力な候補として唯一残されていた『続五明題集』との比較、検討が要請されるのである。そこで、(2) (2)の詠歌を掲載している『続五明題集』の歌題配列の有様を見てみると、「秋夜恋」「冬恋」「初冬恋」「冬夜恋」「歲暮恋」「曉恋」「曉更恋」「暮恋」「夕恋」「夜恋」「深夜恋」のごとくで、さらに、この十一題下に収められた例歌二十四首を吟味してみると、和歌のなかに「月」を詠み込んでいるのが、当面の四首で、残りの二十首には「月」が素材として扱われていい実態が判明する。しかも、当面の四首は、『続五明題集』の配列順序もまったく『いざよひ物語』のそれと符合しているのだ。ここで、原拠資料とは異なる歌題を有しながら、これらの四首が『いざよひ物語』では一括して「寄月恋」の例歌として、『続五明題集』の配列順で掲載されている実態の背景を考えてみると、『いざよひ物語』の編纂目的と関係が深いようと思量される。すなわち、『いざよひ物語』の編纂目的については後述するが、『続五明題集』収載歌が『いざよひ物語』で別の歌題のもとに掲載されたのは、『いざよひ物語』の編者の意志による所為である、と考慮するのがもともと妥当性を有するのではあるまいか。この点は、『いざよひ物語』が「寄月恋」の例歌として収載している七十一首のうち、原拠資料の歌題に合致するのはわずかに二十三首のみで、残りはすべて別の歌題の例歌であるという実態からも裏付けられ、要するに、「寄月恋」の歌群七十一首は、『いざよひ物語』の編者が自己の意図で行った再編集と考慮

され、ここには類題集の編纂基準を越えた文学作品たらしめようとする編纂意図が認められようか。

このような次第で、『いざよひ物語』が『続五明題集』とかなり密接な関係にあることは濃厚なのであるが、このことを裏付ける事例をもう一つ指摘しておこう。それは『風雅集』の

(2) 一すじにうきよりも猶うかりける 有しにかはる人のこゝろ
は

(2) みをしらぬおもひと人やたがふらん うきをばをけるうへの
おもひを

(2) おもはぬになす心しもいかなれや つねはながめてなみだの
みうく

(2) わびつゝは人にまかせてうらみぬを うきをもしらぬこゝろ
とや思ふ

(寄情恋・一〇四)
の(2)の永福門院右衛門督・教良女・花園院兵衛督・公宗の四首に關してである。この四首は、原拠資料の『風雅集』と『類題和歌集』にとびとびに当該歌題下に収録されている以外には、まったくこのままの形態で収載を見る歌集は、唯一、『続五明題集』のみである。したがって、この四首の『続五明題集』との一致はかなり強烈な証拠と認められそうだ、ここに、この事例やこれまでに指摘したいくつかの事例からみて、『いざよひ物語』が直接に『続五明題集』に依拠して収載されたとみることは許されるであろう。

なお、このほかにも『いざよひ物語』が『続五明題集』に依拠して収載されていることを証明する事例はあるが、それらをこれ以上あげることは煩瑣なうえ、それほどの意味もつまないと判断されるので、以下には、『いざよひ物語』収載歌の『続五明題集』における

る歌題表示と仮番号を、島原松平本『続五明題集』(一一一一・一)によつて掲げ、大方の参考に供したいと思う。

『いきよひ物語』撰集資料一覧表

寄溪恋	・ 一一七五
寄海恋	・ 一一七三
寄獸恋	・ 一二九五
寄猪恋	・ 一二九六
寄虫恋	・ 一二九七
(未收載・新後拾遺集)	100
寄人恋	・ 一二三〇七
寄身恋	・ 一二三〇八
寄心恋	・ 一二三〇九
寄情恋	・ 一二三一〇
寄夢恋	・ 一二三一一
寄枕恋	・ 一二三一八〇
寄筵恋	・ 一二三八七
寄衣恋	・ 一二三五六
寄紐恋	・ 一二三六九
寄帶恋	・ 一二三六五
寄布恋	・ 一二三七一
寄糸恋	・ 一二三九三
寄鏡恋	・ 一二三四四
寄書恋	・ 一二三二九
寄弓恋	・ 一二四〇五
寄玉恋	・ 一二三四四
寄箱恋	・ 一二三四二
寄繩恋	・ 一二三九七
寄船恋	・ 一二八九
寄網恋	・ 一二九九
寄篷恋	・ 一二九八
寄鐘恋	・ 一二三九一
寄水恋	・ 一二八五
「月前別恋」	「秋夜恋」
「月前恋」	「名所恋」
「月前忍恋」	「忘恋」
「月前恨恋」	「月前恨恋」
「寄月恋」	「寄月絕恋」
「隔一夜恋」	「隔一夜恋」
「寄薄恋」	「寄女郎花恋」
「寄篠恋」	「寄竹恋」
「寄木恋」	「寄杉恋」
「寄松恋」	「寄鳥恋」
「寄泉恋」	「寄泡恋」
「寄江恋」	「寄滝恋」
「寄河恋」	「寄湊恋」
「寄海恋」	「寄獸恋」
「寄猪恋」	「寄虫恋」
「寄筵恋」	「寄人恋」
「寄身恋」	「寄心恋」
「寄衣恋」	「寄情恋」
「寄紐恋」	「寄帶恋」
「寄布恋」	「寄弓恋」
「寄糸恋」	「寄鏡恋」
「寄書恋」	「寄玉恋」
「寄箱恋」	「寄網恋」
「寄繩恋」	「寄船恋」
「寄鐘恋」	「寄篷恋」
「寄水恋」	「寄恋」

以上を整理すると、出典未詳の(1)の歌と『続五明題集』未收載の(7)の歌を除く、残りの百二十一首の原拠資料は、『風雅集』二十四首、『新千載集』三十五首、『新拾遺集』二十二首、『新後拾遺集』首、『新統古今集』三十首といふことになる。

四 内容・編纂目的・成立時期などの問題

ところで、『続五明題集』からの抄出歌で編纂された『いざよひ物語』の内容を見ると、「月前忍恋」「寄月忍恋」「忍待恋」「月前待恋」「不逢恋」「逢不相恋」「別恋」「曉別恋」「月前別

ここに『いざよひ物語』の編纂目的は何かの問題が提起されようが、この問題に示唆を与えるのが、冒頭の次の序文である。

比はやよひの十六のよひ、くも井にあそぶ月をながめて、むかしもいとなつかしくこひしく侍りぬ。いにしへをおもひいで、くちすさびしたるやまどうた、人の心のたねとやなんらんと、も

しほぐさかきあつめつゝ、しるし侍りぬ。

すなわち、「ある三月の十六夜の宵に、宮中で、管絃の遊びをしながら、雲に出入りする月を眺めていると、昔がなつかしく、恋しくなりました。その昔をなつかしく思い出しながら、思わず心に浮かんだ歌を吟じましたが、その思わず吟じた和歌などが、これから

歌を詠もうとしている人たちの参考にでもなるだろうか、と思って、手許の詠草類をかき集めて記してみました」と序文は記しているが、この序文の記事に窺われる本書の執筆意図によれば、本書は、「むかし」を「なつかしくこひしく」思い出しながら、編者が口ずさんだ詠歌類が、歌を詠み始めようとしている人たちへの参考にでもならうとの考えのもとに撰集された類題集ということになる。この点、本書には、題詠歌を作る際のモデルたり得るべく、典型的な歌題および例歌で編纂された、単なる詠歌手引書とは違った性格・役割が指摘され、ここには通常の類題集とは異なった文学作品的類題集を編纂しようとする、編者の意図も多少ながら認められるのではなかろうか。その意図の表れか、本書には、次の四箇所に詠歌作者注記が見出されるのである。すなわち、

（28）月かけに身をやかへましはれてふ 人のこゝろをいかでみるべき

（29）しるらめやはのなかにみえしみか月の そらにも人を恋やわたるべき

（30）（同・六五）

の28の詠に「儀同三司母の歌なるべし」、29の詠に「家長卿の歌なるべし」とあるのと、「寄月恋」の例歌に「右七十一首 参議為家」、「寄雲恋」の例歌に「右八首之詠歌為家卿」とあるのがそれであるが、『続五明題集』からの抄出歌で、明らかにここに注記した歌人の歌でない事情も自明な歌で撰集しておきながら、何故に、「いざよひ物語」にはこのような注記がなされたのであろうか。

まず、28の歌に付された注記について、安田氏は「この歌は、典拠と見られる『新後拾遺集』では『天曆御製』となつてゐる。また、『村上御集』『万代集』では『広幡御息所』、『玉葉集』では『源

詞子』の詠（村上天皇への返歌）となつてゐる。いずれにしても、『儀同三司母』の歌ではなく、この注記がなぜ付されているかは不審」と言い、また、29の歌に付された注記についても、同氏は「家長卿」に相当する人物は見出せない。後鳥羽院の和歌所開闢であった「家長」とすれば、「卿」と記すのは不適当である。あるいは「家良」の宛字とも考えられるが、それにしても、この注記も、65の歌は『宝治百首』の歌であるから、不審である」と言い、「寄月恋」に付せられた注記についても、同氏は「右七十一首 参議為家」は、為家詠の意とも、為家撰の意とも解せられるが、「七十一首」中の多くが為家没後の詠であるから、いずれも当らない」と言われるが、まったくそのとおりである。しかし、これらの注記が誤った内容であることを先刻承知である編者の立場に立つて考えてみるとならば、28と29の歌に付された「儀同三司母」と「家長」とは、序文でいう「いとなつかしくこひしく」「いにしへをおもひ」出した内容であることを先刻承知である編者の立場に立つて考えてみながら詠じた歌の作者として、故意に演出的に設定された注記と考慮され、また、「寄月恋」の例歌に付された「右七十一首 参議為家」なる注記は、「寄月恋」の例歌が七十一首で、七十一首目の歌のみが為家の詠歌である意とも、あるいは、これらの七十一首が為家によって選出された意とも推察されるが、いずれにせよ、この注記もまた、故意に舞台装置された演出と考慮されるであろう。ちなみに、「寄雲恋」に付された「右八首之詠歌為家卿」の注記が、編者が故意に、為家が詠じた歌であると演出的に施したもの、と推察されることは言うまでもなかろう。

つまり、「いざよひ物語」の注記については、『続五明題集』における歌題表記を無視して、一括「寄月恋」の例歌として扱つた、

『いざよひ物語』の編者の作為的処理とまったく同様に考慮されるわけだが、このことは、『いざよひ物語』の本文に、典拠とした『続五明題集』のそれと異同する箇所がまま指摘される現象を解明する手掛りを提供するように考えられる。その主要な異同箇所を指摘すると、次の『いざよひ物語』の

(30) 人とほゞ月ゆへ落るならひぞと こたへてそでののみだとめ

まし (寄月恋・六)

(31) わかれぢをいそぐこゝろの鳥よりも まだそらたかき月ぞう

れしき (同・一六)

(32) 音づるゝはつかの月のつらさより ねまちのかげもまたやつ

たへむ (同・四八)

(33) いにしへのしげはた帶のいくかへり 我かたこひにむすばゝ

るらん (寄帯恋・一一〇)

の(30)～(33)の本文が、『続五明題集』では、(30)の下句は「答やせまし

袖の涙を」、(31)の二・三句は「いそがす鳥の声よりも」、(32)の歌は

「夜がれそむるね待の月のつらさより はつかの影も又やへだて

ん」、(33)の下句は「我かた恋の末にむすばん」のこととなつている。

このほか、『いざよひ物語』と『続五明題集』の間に指摘される小

異同は、およそ四十箇所に及び、それらを検討すると、单なるケア

レス・ミスによる異同というよりも、『いざよひ物語』の編者によ

る改訂と考慮されるようと思われる。それは、(30)・(31)・(33)の詠が、

もとの歌の歌句を少々編者好みの表現に変えて、もとの歌の世界と
恋の世界の歌へと転じられている事例によって、証明されるであ

る。となると、現存の『続五明題集』に未収録の(7)の歌はともかく『いざよひ物語』が依拠した『続五明題集』には、この歌は収録されていたと推測される。出典未詳の(1)の歌はもしかすると、『いざよひ物語』の編者の詠作である可能性も生じてくるのではないか。

それはともかく、「右八首之詠歌為家郷」の注が付せられている七十九首目あたりまでの箇所には、少なくとも、編者が序文で表明している「いにしへをおもひで、くちすきびしたるやまとうた、人の心のたねとやならん」という編纂意識が働いていると見てよいのではなかろうか。そして、「寄葵恋」の例歌である

(34) ほのかに人をみあれのあふひ草 こゝろにかけて恋ぬ日も

なし (寄葵恋・八〇)

の(34)から最後の「寄水恋」の例歌である

(35) ともすれば岩間づたひに行く水の とゞこほりてもぬるゝ袖

かな (寄水恋・一一三)

の(35)までの歌題・例歌各一首の歌群には、安田氏が「本書の編纂さ

れた目的は、他の類題歌集の多くと同様、詠歌の手引とするためであつたる」と言われる側面が多分に認められるわけだが、しかし、

この歌群にも編者の先程触れた編纂意識が働いていないことはない

であろう。ここでこの編者の編纂意識について憶測すれば、序文の

「比はやよひの十六のよひ、くも井にあそぶ月をながめ、むかし

もいとなつかしくこひしく侍りぬ」の記述や、藤原為家を注記に指

摘している事例から見て、この撰集には、阿仏尼の立場に立つての

編纂意識が認められないであらうか。というのは、序文の「十六の

よひ」および表題の「いざよひ物語」は、当然、阿仏尼の『十六夜

「日記」を念頭においての措辞および命名であろうし、『いざよひ物語』の序文の内容も、『うたたね』の冒頭の「もの思ふことの慰むにはあらねども、寝ぬ夜の友とならひにける月の光待ち出でねれば、例の妻戸おしあけて、ただひとり見出だしたる、荒れたる庭の秋の露、かこちがほなる虫の音も、物ごとに心を傷ましむるつまとなりければ、心の乱れおつる涙おさへて、とばかり来しかた行くさきを思ひつづくるに』の記事と多少似通つた侧面も指摘されるからである。ところで、私家集名を冠する中世私撰集の『光俊集』の奥書には、「右此一冊者先哲詠吟以所光俊朝臣心用粗集云々」なる記事があり、筆者は、この記事を、「先哲」の「詠吟」した和歌を収録する類題集などから、光俊朝臣の立場に立つて、撰集して一書とした、と解するのであるが、この『光俊集』の記事を参考にするならば、『いざよひ物語』は、まさしく阿仏尼の立場に立つて撰集された歌集となることになるであろう。ここに『いざよひ物語』の編纂目的は、通例の類題集の多くが有する詠歌の手引書としてのみの役割以上に、「むかし」を「いとなつかしくこひしく」思い出しながら、阿仏尼の口ずさんだ詠歌という虚構的に限定された例歌によって、文学作品的世界の構築を意図しながら、和歌を詠む初「人の心のたね」ともなるに足る詞華集（アンソロジー）を編纂することにあつたと言えるであろう。

最後に、『いざよひ物語』の成立時期は、いつであろうか。この点については、安田氏は、「本書は、『新続古今集』までの歌を持っているのであるから、その成立は、『新続古今集』の成立以後と定めよう」と言及されているが、成立時期の上限はもう少し限定できるようだ。なぜなら、『いざよひ物語』の撰集資料が『統

五明題集』とほぼ推断できることを論証したことから、『いざよひ物語』の成立時期が『続五明題集』のそれより以降であることは自明の理であるからである。ところで、その『続五明題集』の成立時期は、その序文の末尾に「時に永正十二年南呂三日になん、みじかき筆にまかせ、いざよひ物語』の内部徵証から特定することは不可能なので、この点からます、『いざよひ物語』の成立時期の上限を、永正十二年八月三日より以降と想定し得よう。そして、その下限については、『いざよひ物語』の内部徵証から特定することは不可能であるが、本書の書写年代が、安田氏も「室町後期写か」と言われるよう、室町後期と推定できるので、この点から一応、特定し得るであろう。となると『いざよひ物語』の成立時期は一応、永正十二年八月三日より以降から、室町時代後期までの間といふことになるだろう。

なお、『いざよひ物語』をめぐって検討しなければならない問題は少なくないであろうが、『いざよひ物語』の成立の問題について、おおよその結論を導き出し得たいまは、それらの問題は今後の課題とすることにして、ここで一応、擱筆したいと思う。

〔注〕

(1) 『一八明題集』については、雑部の考察にすぎないが、拙稿「本妙寺藏『一品經等法華和歌』（花園大学国文学論究』第十五号、昭和六二、一〇)、『題林愚抄』については、拙著『中世私撰集の研究』（昭和六〇、五、和泉書院）の序章の「中世私撰集の撰集資料」に『和歌題林愚抄』から『明題和歌全集』へ、「明題和歌全集』について、拙稿「明題和歌全集の成立」（『国語国文』第四三卷七号、昭和四九・七）、『摘要和歌集』については、拙稿「摘要和歌

集」の成立（上）・（下）」〔『中世文学研究』第十二号・十三号、昭和六一・八、六二・八〕を参考。
(2) 摘稿「『続五明題和歌集』の成立」〔『中世文学研究』第十四号、昭和六三・八〕を参考。
(3) 次田香澄氏『うたたね全訳注』（講談社学術新書）一九八、昭和五三・一）から引用。
(4) 摘著「中世私撰集の研究」（昭和六〇・五、和泉書院）の第二章第一節の「『光後集』の成立」を参考。

——花園大学教授——